お礼の手紙における誤用研究
—シンガポールの初級日本語学習者を対象に—

ウォーカー 泉
内海 朋子
シンガポール国立大学語学教育研究センター

キーワード：お礼の手紙　誤用　初級日本語学習者　表現意図　待遇表現　辞書開発

１．はじめに

お礼の手紙は、初級日本語学習者の作文教育の学習目標の一つとなっている（小宮1992）。手紙文は、学業に必要な作文、例えば、レポートを書いたり講義を聴いてノートをとったりという高度な能力が求められるものではないが、生活面における大切なコミュニケーション手段の一つである。しかしながら、手紙には、話し言葉とは異なる特有な語彙や表現も必要であるため、初級学習者にとっては困難な課題の一つであると言えよう。

吉川・一甲（2007）は、以下の例をあげ、初級の学習者に辞書を渡して、自分の母語で思ったことを日本語に翻訳しながら作文を書かせるということがいかに危険であるかということに気づいたと述べている。

> 私が担当していた初級後半のクラスの学習者による日本語の手紙です。その手紙を読んでいたら、最後に、日本語で「接吻」と書いてあったのです。「広辞苑」を調べてみたら、「相手の唇・頬・手などに唇を触れて吸い、愛情・尊敬を表すこと。くちづけ。くちすい。キス。」と書いてあります。多分、この学習者が書きたかったのは、ポルトガル語でよく使われる“beijos”（キス）じゃないのかなあ、と思いました。

このように、学習者が手紙を書くときには、辞書を引いたり、参考書から例文を引用したりすることが多いと考えられるが、適切な情報を得たり、それらを適切に運用することは容易ではない。さらに、手紙には、待遇的な要素もかかわってくるため、あらゆる誤用が起こり得ると考えられる。そこで、本研究では、初級学習者の書いたお礼の手紙における誤用や非用を分析することにより、学習者が陥りがちな誤りの傾向を見出し、作文教育や辞書開発に役立てたい。

２．研究の目的・意義

本研究の目的は、初級日本語学習者の「お礼の手紙」における誤用や非用を調査、分析することにより、作文教育や辞書開発に有用な示唆を得ることである。学習者の書いた手紙文における誤用については、さまざまな観点から研究されてきた。例えば、構造上の問題の分析（西村・鹿島2001、李2005）、特定の文法項目に関する比較研究（富田2011）、待遇表現に関する分析（宮田2005）などがある。

しかし、これまでの先行研究の多くは、調査研究のために実験的に書かせたものをデータとして用いているものが多く、「生の手紙」を分析したものは少ないようである。蒲谷（1990）が、日本語教育は、表現主体の主体が学習者であることを再認識する必要性があると指摘し、それには、学習者が表現主体として意志・感情を表現することが重要であると主張しているように、学習者の誤用の実態や学習上の問題は、学習者が真の表現主体となってこそ鮮明に現れるものではないかと考えられる。

そこで、本研究では、学習者が実際に「お礼の手紙」を書く必要性を感じる状況を設定し、そこで書いた手紙をデータとして分析することにした。

３．研究方法

３．１　調査資料と対象者

本調査で使用した資料は、日本語学習者の書いた「お礼の手紙」43通である。執筆者は、学習時間数約210時間修了の初級学習者で、『みんなの日本語』47課を学習中だった。この段階では、「ていただく」「てくださる」などの恩恵表現や「お国はどちらですか。」「いらっしゃいませ。」などの敬語表現を断片的には学習しているが、尊敬語や謙譲語といったいわゆる敬語の導入はなされていなかった。学習者の国籍はシンガポール人29名とインドネシア人4名、中国人10名で、いずれも英語と中国語の話者である。「お礼の手紙」はプロジェクトワークの活動の一つとして日本人高校生に宛てたもので、以下の枠で囲んだ初稿を調査分析対象とした[1]。

2012年9月19/20日	授業でお礼の手紙の書き方について参考資料[2]を参照しながら、簡単に説明。
2012年9月22日午後	日本人高校の学園祭を訪問。
2012年9月28日午後	日本人高校生が大学を訪問。5名ほどのグループに分かれてキャンパスを案内した後、「自分の好きなもの」についてグループ内で発表しあう。
2012年10月3/4日	「お礼の手紙」の初稿の提出。
2012年10月10/11日	「お礼の手紙」のフィードバック。
2012年10月17/18日	「お礼の手紙」を自己修正後、再提出。
2012年10月31日	日本人高校の学校案内に参加。「お礼の手紙」を手渡す。

３．２　分析方法

本研究では、教育的見地から、初級学習者にありがちな助詞や活用の誤りといった文法的な問題だけでなく、文法的には正しくとも待遇的には不適切だとみなされる点も把握したいと考えた。そこで、まず、誤用・非用を含む文全体を抽出し、それらを表現意図別に分類し、問題を分析した。そして、それらをⅠ．開始部　Ⅱ．展開部　Ⅲ．終了部に分けて整理した。なお、データ中の大学名、高校名、学園祭名などの固有名詞については、大学、高校、学園祭などの一般名詞に置き換えた。

４．結果

分析の結果、ほとんどの手紙が以下のような表現意図で構成されていることが判明した。

Ⅰ．開始部　　時候の挨拶
Ⅱ．展開部　　感謝 / 感想（気持ちの表明・印象）
Ⅲ．終了部　　感想伺い・願望表明　/　意志表明・勧誘・依頼 / 終わりの挨拶

そこで、これらの意図表現別に誤用と非用を分類し、表にまとめた。

４．１　開始部

全43通のうち、31通が時候の挨拶で始まっていた。その3分の2にあたる20例に、以下のような問題があった。以下、各表の冒頭には適切な表現例、その下には主な誤用・非用例、右枠には、市川（1997）の誤用の分類を参照し、主な問題点を指摘した。

４．１．１　時候の挨拶

暑い日が続いていますが、皆様いかがおすごしでしょうか。

1-1a 1-1b	10月もう来て、もうすぐ涼しくなりそうですが、皆様いかがお過ごしでしょうか。 日本の涼しい秋風がよくふいていますが、シンガポールは毎日暑いですね。	待遇表現上の問題（相手の「場」に対する認識不足）
1-2a 1-2b 1-2c	シンガポールは今暑い日が続きますね。皆様いかがおすごしでしょうか。 シンガポールは晴れの季節だと思いますが、いかがお過ごしでしょうか。 シンガポールはもうすぐ雨が多い季節だと思いますが、いかがお過ごしでしょうか。	待遇表現上の問題（共有している「場」に対する認識不足）

「時候の挨拶」では、1-1のように日本の季節について書いた例があったが、読み手は同じシンガポールにいるため、それでは奇妙である。一方、読み手もシンガポールにいるということを認識していながらも、例文に自分なりに手を加えてしまったために起きた誤りもあった。例えば、1-2b と1-2c では、「思う」が使われているため、遠方に向けて書いたような印象を与えてしまっている。その他、「暑中お見舞い申し上げます。」も一例あったが、年中常夏のシンガポールではこういった期間限定の挨拶は不自然な感じがする。以上のように、「時候の挨拶」では、文法的には正しくとも、意味的に問題のある例が多かった。その理由は、学習者の相手の「場」や共有している「場」に対する認識が不足しているためであると考えられる。

４．２　展開部

展開部は、学園祭へ招待してくれたことや大学を訪問してくれたことに対する「感謝」の気持ちを述べた後に、「感想」を述べるという構成だった。このような「感謝」「感想」を述べる文には、「嬉しかった・楽しかった・残念だった」などといった「感情形容詞」（村上2011）が用いられていたが、それらに付随する複雑な「文の結束機能」（守屋2002）から逸脱したために、多様な誤用や非用が起きていた。

４．２．１　感謝

「ありがとう」など「感謝」を述べる表現の前節の動詞には、「くれる」「もらう」など授受表現が必須であるが、それに関連する誤用や非用が多かった。

～ていただいて（てくださって）、ありがとうございました。	
2-1a　先日大学を訪問していただいてありがとうございました。 2-1b　先週の学園祭に招待してくださって、ありがとうございました。 2-1c　この間大学に来ていただいて、とても嬉しかったです。	日にちの後の「は」の脱落
2-2a　みなさま親切な迎えで、どうもありがとうございました。 2-2b　そんなおもしろい学園祭を行うこと、どうもありがとうございました。 2-2c　みなさんの数ヶ月の前より周到な準備はありがとうございました。	「て形」の誤形成、授受表現の脱落
2-3a　私たちを誘って、本当にありがとうございました。 2-3b　日本語がわからないとき、もっと簡単な日本語で話しまして、ありがとうございました。 2-3c　友達になって、ありがとうございます。	授受表現の脱落
2-4a　先週の月曜日に学園祭に招待して、面白くしていただいて、ありがとうごとうございました。 2-4b　学園祭に招待して、私たちを楽しませていただいて、どうもありがとうございました。	授受表現の脱落、混同

また、授受表現は「て形」にする必要があるが、2-2のように「て形」にすべきところを名詞化している例が多かった。また、「て形」にしていても、2-3のように、授受表現が

脱落している場合も多かった。さらに、授受表現は使っていても、「～てくれる/～てくださる」を使うべきところに「～てもらう/～ていただく」を使うなど、語彙の混合もあった。もう少し複雑な例としては、2-4のように、動詞を二つ並べた場合に、二つ目の動詞だけに授受表現を付加したために、舌足らずな感じが残る例があった。このような場合は、「先日は、私たちを招待してくださり、また、楽しませてくださって、ありがとうございました。」と「くださり」などを使って授受表現を繰り返すか、２文に分けて書く必要がある。

４．２．２　感想

「感想」を述べる文には、「うれしかった」「楽しかった」「残念だった」などの「感情形容詞」が使われていた。これらも「ありがとう」と同様に、前節に「て形」を用いる必要があるが、それが使えていない例が多々あった。

～て、うれしかったです。		
3-1a 3-1b 3-1c	皆様大学へ来たことにうれしかったです。 ９月２８日、金曜日、大学へ来て、うれしかったです。 キャンパスツアーの日に皆様は大学生活に興味があって、たくさんことを聞いていただきたことうれしく思います。	授受表現の脱落、誤形成
3-2a 3-2b 3-2c	初めて高校へ行って、本当にうれしかったです。 時間が短すぎて残念でしたが、たくさんいい思い出を作ってうれしかったです。 皆さんの学園を見せて、学生生活について習って、とても嬉しかったです。	可能形の脱落
3-3a	学園祭で日本の文化や伝統などはシンガポールとどう違うかわかることができますから、うれしかったです。	「できる」の付加

3-1a の「皆様大学へ来たことにうれしかったです。」などのように、たとえ「来てうれしかったです。」と「て形」にしたとしても座りが悪い例があった。「来てくれて」、あるいは、「来てもらって」など授受表現を付加する必要があるためである。また、3-2b の「たくさんいい思い出を作ってうれしかったです。」などのように、「いい思い出が作れて」と可能形にする必要がある場合もあった。これは前件が感情の対象である場合、「感情形容詞」の前には、「非意思的な表現」（蓮沼他2001）や「非自己制御的」（仁田2004）な表現、すなわち、「事態の成立・実現を自ら制御できない表現」を用いる必要があるためであると考えられる。

一方、3-3a では、「わかることができる」と書いていたが、この場合は「できる」を付加する必要はない。「わかる」にはすでに可能の意味が含まれているため（市川2005: 272）、「わかって」、あるいは、「わかったので」で十分だからである。「わかったから」を使用することも出来るが、丁寧さに欠ける（市川2005: 357）ような印象を与える。

～て、残念でした。		
4-1a 4-1b 4-1c 4-1d	間違い探し部屋に入らなかったのは残念でした。 いくつかのゲームはとても人気があったので、プレーするできなかったが、残念です。 色々な面白いものがありますが、時間はあまり足りませんでした。それは残念でした。 時間がちょっと少ないですが、日本図書館とユータウンへ行くことができました。これは残念です。	「できなくて」の誤形成

「残念だ」という気持ちを表す場合も、前節に「～なくて」など「て形」が必要となるが、「のは」や「が」などを用いた誤りが多かった。また、「残念だ」の前節にも、「事態の成立・実現を制御できない表現」を用いる必要があるが、それができていない例もあっ

た。例えば、4-1aは、「て形」にするだけでなく、「入れなくて」と可能形を用いる必要がある。同様に、4-1b も「プレーすることができなくて（参加できなくて)」とするべきところである。一方、4-1c や4-1d のように、２文で表している例もあった。特に、4-1d の場合は、「これは」が前文を指してしまうため、行くことができたことが残念だったかのように読み取れる。しかし、「残念だった」のは、「時間が少なかった」ことであるため、順序を入れ替え、「日本と図書館とユータウンへ行くことができましたが、時間がちょっと少なくて残念でした。」などとすべきところである。

このような誤用から、「残念だ」も学習者にとっては困難な表現であることがわかった。

～て、楽しかったです。		
5-1a	時間は短いですが、皆さんに色々なことを話するのをとても楽しいがた。	形容詞の誤形成
5-1b	すべての活動は楽しいでしたね。	
5-2a	初めてこんな活動に参加するので、本当に楽しんでいた。	形容詞・動詞・名詞の混同
5-2b	初めて日本人の高校へ行ったので、とても楽しみにしました。	
5-2c	皆様と話して、楽しみです。	
5-3a	学園祭に参加するのはとても楽しかったと思います。	「思う」の付加
5-3b	学園祭について、楽しかったと思います。	
5-4a	初めて学校の学園祭に行っ（て）ほんとに楽しかったの経験でした。	英語からの干渉

「楽しい」についても、多様な誤用があった。まず、5-1のように、形容詞の過去形の誤形成があった。また、5-2のように、「楽しい」を「楽しむ」「楽しみ」など動詞や名詞と混同している例も多かった。さらに、5-3のように、「楽しかった」の後に「と思います」を付加したために、相手に気持ちを伝えているようには聞こえない例もあった。また、「楽しかった」ことについて表す場合も、「うれしかった」と同様に「て形」が必要となるが、「て形」の代わりに「のを」や「ので」などを用いている例も多かった。感情を表す表現の前には「て形」が必要であるという点を強調して指導する必要がある。

一方、「楽しかった」には、「うれしかった」とは制約が若干異なる場合もある。それは、「楽しかった」の前件には、必ずしも可能形がくる必要はないということである。その理由は、「行けて/話せて、うれしかった。」の場合は、「行くこと/話すこと」が「うれしい」という感情の直接の「対象」となっているが、「行って/話して、楽しかった。」の場合は、「行ってからしたこと」や「話した内容」が「楽しい」という感情の「対象」であり、「行くこと/話すこと」は、「感情の対象を認識する段階の動作」（村上2011: 184）を示しているにすぎないため、「文の結束機能」が弱まるからではないかと考えられる。

以上、「感情形容詞」にはさまざまな制約がある上、語彙によって用法が若干異なるため、誤用が起きやすい。初級教科書では、「感情を表す形容詞の前には「て形」が用いられる」程度の説明しかなされていないのが一般的であるが、正しく用いるためには、そのような説明では十分ではないことが、これらの誤用によって明らかになった。手紙文に限らず、コミュニケーションの中で「感情を表す」機会は頻繁にあると考えられることから、より詳細な記述が必要である。

「感想」を述べる文には、以下のように「感情形容詞」以外の誤用も多く見出された。

その他の感想		
6-1a	それに、ゲームから、活動から、私たちが日本の文化をさらに理解来られました。	英語からの干渉
6-1b	皆さんは顔に笑顔を持っていましたから、私は気楽に感じました。	
6-1c	学園祭の時、私は大学の人たちを歓迎した気持ちを感じました。	
6-1d	それに、行われた活動だけでなく、早稲田高校の学生も私の心にいい印象をづけました。	
6-1e	初めて日本の祭りを見ることができて、日本の料理をおいしく食べて、ゲームをたくさん遊んで、本当にうれしかったです。	

6-1f	早稲田高校を見学したり、皆さんと遊んだり日本文化の学校祭を経験したりしたいと思いましたが、いけなかったのは残念でした。	
6-2a 6-2b 6-2c 6-2d	そして、キャンパスツアーの時、皆さんは私たちの指示を守りました。 日本図書館、ユータウンとスポーツセンターへ連れて行くつもりでしたが、時間がちょっと足りないので、スポーツセンターを見に行けませんでした。 学園祭にはあなたたちはよく準備しましたね。 悲しい気持ちも嬉しい気持ちも全部表現できました。とてもすごいでしたね。	待遇表現上の問題（上から目線）
6-3a 6-3b	それから、中間休みので、セントラルフォーラムで蚤の市がないことはちょっと残念でした。 中間試験の圧力を全部忘れました。	辞書からの引用（外来語の非用）
6-4a 6-4b 6-4c 6-4d 6-4e	対照的に、国立大学キャンバスツアーはちょうと簡単でしたね。 高校生の日常を楽しんでいますか。 再度国立大学へ行ければ、ぜひ知らせてくれますよ。 ツアーの後で皆さんだけ帰らないで一緒に食事するので、光栄に思っています。 皆さんは教室をきれいに装飾したり、大学の学生と一緒に色々なゲームをしたり、自分で作った映画を見せたりして、おもしろい経験でしたね。	辞書からの引用（漢語の誤用）
6-5a 6-5b	皆さんのかばんをみると、昔の大切な記憶はあふれました。 一日中人々を招待していて、疲れましたが、暑かったろうかで並んでいた私たちを微笑みながら煽いでくださいました。	辞書からの引用（文学的）

6-1は構文やコロケーションに問題のある例で、英語を直訳したために起きた誤りであると考えられる。6-2は、読み手に上から目線だと捉えられかねない表現である。例えば、「指示を守る」は「話を良く聞いてくれる」と授受表現を用いたり、「連れていく」は「案内する」という表現を用いることにより、そのような印象をやわらげることができる。6-2cは、学園祭に感銘を受けたり、ねぎらいの気持ちを表現したりしようとしたのであろうが、「あなたたち」や「よく準備しましたね。」という表現により、相手を評価しているように聞こえる。この場合は、「準備していただき、ありがとうございました。」など授受表現を付加したり、「準備してあったので、びっくりしました。」などと感情表現を使ったほうが相手に良い心象を与えると思われる。

6-3は辞書を引いて書いたと思われる例で、大学で行われるバザーを「蚤の市」としたり、プレッシャーを「圧力」としたりするなど、外来語を無理に翻訳した語彙が用いられていた。6-4も辞書を引用して書いたと思われるが、漢語の使用により、表現が硬すぎて不自然に感じる例である。また、6-5のように、文学的になりすぎた例もあった。

以上からわかるように、学習者が適切な語彙を選択することは容易ではないため、類義語やコロケーションを含めたより詳しい説明が必要であると言えよう。

４．３　終了部

終了部は、読み手に「感想」を尋ね、楽しんでくれたことを願い、またいつか会いたいという「意思表明」をしたり、連絡がほしいと「依頼」をしたり、また大学に来るように「勧誘」したりした後に、相手へ「配慮」を示して手紙を終結するという構成で書かれていた。

４．３．１　感想伺い・願望表明

～はいかがでしたか。楽しんでいただけましたか。		
7-1a	ところで、大学でのキャンパスツアーはどう思いますか。楽しかったでしょうか。	待遇表現上の問題（直接的）

7-1b　今週、大学ツアーに参加してどう思いますか。楽しかったでしょうか。	

「感想伺い」には、文法的には正しくとも、違和感をおぼえる例があった。例えば、7-1の「どう思いますか。」は感想ではなく、意見を求められているように聞こえてしまうため、「どう思いましたか。」の方が適当である。しかし、それでも単刀直入に聞こえるため、「いかがでしたか。」と敬語を使って表現をやわらげた方がよいだろう。また、「楽しかったでしょうか。」よりも、「楽しんでいただけましたか。」と授受表現を用いて自らが恩恵を受けるような聞き方をした方が、相手を思いやる気持ちが伝わるだろう。

楽しんでいただけたら、良かったです。	
7-2a　時間がちょっと短かったが、楽しかった願っています。 7-2b　その時、皆様も楽しんだと欲しいです。 7-2c　皆さんも楽しい時間をすごしたといいです。 7-2d　時間は確かに短いなんですが、みなさんに少しでも喜ばせたら嬉しいだと思います。	「～たら」の誤構成

7-2は、「～たら」を用いた願望表明が書けなかった例である。その他の多様な既習文型を駆使しているところから、習得の難しい文型であることが窺える。

４．３．２　意思表明・勧誘・依頼

意志表明　　来年もチャンスがあれば、ぜひ参加したいです。	
8-1a　時間があるとき、大学に来たら、キャンパスガイドをあげたいですから、是非知らせてください。 8-1b　私たちは必ず国立大学についてよく教えてあげます。 8-1c　もっと面白い場を紹介してあげますよ。	待遇表現上の問題（恩着せがましい）

これらは、他者に対する自分の行為に「～てあげる」を付加したために、恩着せがましくなってしまった例である。この問題は、授受表現の指導の際に注意してあり、会話の中ではあまり出てこなかったが、本データでは数例見つかった。手紙では、相手に何かをしてあげたいという思いが強くなったため、付加してしまったのではないかと思われる。

勧誘　場所＋で～しましょう。	
9-1a　機会があれば、もう一度大学へ遊びに来て、キャンパスで一緒にフリスビーをしましょう。 9-1b　チャンスがあったら、ぜひ大学に来て、一緒に遊びましょう。	「に来て」の付加

9は、「来る」が相手の行為である一方、「遊びましょう」は双方の行為であり、二つの動詞の動作主が異なるにもかかわらず、一文にしてしまったため、文がねじれてしまった例である。このような問題を避けるためには、「来て」の代わりに助詞を用いて「場所＋で～しましょう」とするか、「来てください。」や「来ませんか。」などで一度文を終えてから二つ目の行為を書く必要がある。

依頼　フェイスブックで友達になりませんか。	
10-1a　時間があれば、私たちフェイスブックとメールでよくおしゃべってください。 10-1b　将来、皆様に依然と連結したいので、是非フェイスブックでアッドしてください。	待遇表現上の問題（強引） 英語からの干渉

手紙の終了部には、これからも相手と良い関係を続けたいという気持ちから、さまざま

な「依頼」がなされていたが、「てください。」は強引に聞こえるので、「友達になりませんか。」といった勧誘表現を用いた方がよいだろう。

また、英語をそのままカタカナにしたり、無理に訳そうとしておかしな表現になってしまっているものもあった。例えば、10-1a の「おしゃべって」は、「chat」というフェイスブックの機能が「おしゃべり」という行為に相当するため、それを動詞として用いて起きた誤用である。10-1b の「連結」は英語の「Connect」を直訳し、「アッド」は、英語の「add」をそのままカタカナにしたもので、「これからも連絡しあいたいので、フェイスブックで友達になってください。」と言いたいところであろう。こういったソーシャルネットワークやコンピューターに関する用語は、英語を中心に次々と生まれているが、日本語でどのように表したらいいかが定まっていない用語も少なくない。母語話者でも、日本語に訳すべきか、あるいは、そのままカタカナで表したらいいのか判断できない表現も多い。あまりの急速な増加に対応できない状況であるということは言うまでもない。しかし、このような用語の中には生活に密着し、汎用性が高まるものもあるため、それらを見出し、適切に辞書に反映していくことは、辞書開発の重要な課題の一つであると言えよう。

４．３．３　終わりの挨拶

終わりの挨拶では、暑さや学校生活の大変さを思いやるなど相手への配慮が示されていた。ここでは、冒頭の「時候の挨拶」と同様、文法的な誤りはなかったが、待遇表現上不適切な表現が用いられていた。

暑い日が続いていますので、お体を大切に。		
11-1a	最近、シンガポールの天気がとても暑いでしょうから、どうぞご自愛ください。	待遇表現上の問題（共有の「場」に対する認識不足）
11-1b	まだ暑い日も続けるでしょうから、どうぞご自愛ください。	
11-1c	まだ雨の季節もあるでしょうから、どうぞご自愛ください。	
11-2a	今は今年の終わりので、学校で忙しそうだと思います。ですから、体に気をつけて、よく休んだほうが良いです。	待遇表現上の問題（忠告的）
11-2b	こんな天気で必ず体を大切にするようにしてください。	
11-3a	長文メールにて失礼いたしました。	待遇表現上の問題（例文集からそのまま引用）
11-3b	取り急ぎ、お礼まで。	
11-3c	暑さ厳しき折、皆様のご健康を心よりお祈り申し上げます。	

11-1のように、「暑いでしょう。」など「でしょう」を用いていた例が多かった。「でしょう」は未来のことや不確実な事柄について用いられる（市川2005:118）が、読み手と書き手は地理的距離が近く、年中暑いことが明らかであるため、不自然に聞こえる。また、「まだ」も日本のように四季があり、時間が経てば季節が変わるということが前提であれば使えるが、常夏のシンガポールで使うのには違和感を覚える。それにもかかわらず「でしょう」が用いられているのは、時候に対する推量を表そうとしていたためかもしれないが、文例集によく用いられている表現であるため、それらを安易に引用した可能性も高い。

11-2は、相手のことを気遣って書いたものだと思われるが、「たほうがよい」や「するようにしてください」という表現が忠告しているように聞こえ、かえって相手の心情を害する可能性がある。このようなニュアンスを避けるためには、「お体を大切に。」などといった表現を用いる必要がある。

11-3は手紙の結びであるが、書いている手紙は決して長文とはいえない上、手紙であるにもかかわらず、「長文メール」であることを詫びたり、会ってから時間が経っているにもかかわらず「取り急ぎ」と書いたり、典型的な結び文を書いていることから、学習者が手紙の書き方の文例集からそのまま引用したことが明らかである。学習者のレベルや相手が高校生であるということを考えると「丁寧すぎる」きらいがあるし、手紙の他の部分に比べてこの部分だけがかなりかしこまっている点も問題である。

これらの例は、例文集から引用する場合は、書き手と読み手の置かれている状況をしっかり認識して書くことが重要であることを示唆している。

５．まとめと考察

５．１　調査のまとめ

本調査で見出された初級学習者の「お礼の手紙」における誤用は、語彙・文法上の問題と待遇上の問題の二つに大別できる。

語彙・文法上の主な問題としては、「感謝」を述べる際の授受表現の脱落や混合、「感想」を述べる際の「楽しかった」や「うれしかった」などの感情形容詞の誤形成、その内容を説明する「て形」や接続の「ので」の誤形成、「願望」を表明する「たら」構文の誤形成などが見出された。また、英語からの転移や辞書からの引用だと思われる不適切な表現もあった。

待遇表現上の主な問題としては、相手との関係や、相手と自分が共有している場に関する認識不足、授受表現の脱落、上から目線、恩着せがましさ、直接的、忠告的な表現などが用いられていることが判明した。

本調査で見出された主な具体例は、以下にまとめられる。

		語彙・文法上の問題	待遇表現上の問題
開始部	時候の挨拶	・日にちの後の「は」の脱落 ・「思う」の付加	・ 相手の「場」、共有している「場」に対する認識不足
展開部	感謝	・「て形」「ていただき」の誤形成	・授受表現の脱落
	感想	・可能形の脱落 ・「できる」「思う」の付加 ・「て形」「できなくて」の誤形成 ・「過去形＋ので」の誤形成 ・辞書からの引用	・上から目線
終了部	感想伺い・願望表明	・英語からの干渉 ・「たら」の誤構成	・直接的
	意思表明・勧誘・依頼	・英語からの干渉 ・「に来て」の付加	・恩着せがましい
	終わりの挨拶	・「まだ」「でしょう」の付加	・忠告的 ・共有している「場」に対する 認識不足 ・例文集からのそのまま引用

加藤（2001）は、手紙文の誤用は、定型表現に関するものと、自分の言葉で書いたものの二つに大別されると述べている。本調査の対象とした手紙文も、そのような大別が可能であると思われる。しかし、本調査のデータでは、定型表現は時候の挨拶と終わりの挨拶のわずかな箇所に用いられているだけで、後者が大半を占めていた。また、引用した部分については、例文を適切に運用することの難しさが露呈する結果となった。「手紙文に限って言えば文例集などから的確に選んで写すことができればよい」（加藤2001）という見方もあるだろうが、本調査で見た限り、それはかなり困難であると言わざるを得ない。学習者は、相手に対する感謝の気持ちや配慮を自分の言葉で何とかして表そうとして工夫したり苦労したりしていたことが明らかであり、それは、単に文章例を並べたてて書いた手紙より、賞賛されるべきことに他ならない。しかしながら、それが文法的な誤用を招いたり、待遇的に不適切な表現を生み出す要因となってしまったのである。

５．２　作文教育や辞書開発への提言

本調査の結果、日本語学習者の手紙文における誤用には、語彙レベルから文型、待遇レ

ベルにいたるまで多様なものがあることが明らかになった。これらを踏まえ、書くための辞書のあり方や教育方法について考察する。

５．２．１　適切な語彙や構文が選べるようにする工夫

まず、学習者が辞書を片手に一人で書けるようになることを理想とするならば、書くための辞書には、適切な語彙や構文が選べるようにする工夫が必要となる。しかしながら、辞書だけに頼ったために起こる語彙の選択の間違いはよく起こることである。その対処法として、石黒・筒井（2009）は以下を挙げている。

1) インターネットで語彙が使用されている頻度や用例を確認する。
2) 例文が多い国語辞典で調べる。
3) 「俗語」「文章語」のような表示のある辞書で調べる。
4) 翻訳ソフトを利用し、訳した日本語がまたもとの言語に翻訳して同じ言葉に戻るようかどうかチェックをする。

さらに、辞書の中に以下のような記述がなされると役立つと考えられる。

―用法の違いを含めた豊富な例文

頻度の高い語彙にはよく使われる構文が提示され、その構文がそのまま運用できるような記述があるとよいだろう。例えば、「うれしい」や「楽しい」「残念だ」といった感情形容詞には、「て形＋残念でした。」や「て形の可能形（できて）＋うれしかったです。」のように、先行する構文が提示されていれば、その語彙を使った文が作りやすくなるだろう。

また、例文が多いということも重要であるが、学習者が必要としている的確な語彙を選択し、適切に運用できるようにするためには、補足説明が必要な場合も多い。例えば、「思う」については、「と思った」「と思っている」「と思う」などの用法の違い、「楽しい」については、相手に感想を伝えるときには「先日は楽しいと思いました」ではなく、「先日は楽しかったです」である、というようなことである。

―「文語」「口語」「古語」「俗語」「文学的」などの表示

これらは、ジャンルや目的に合った語彙の選択を可能とするものである。本調査で見た文学的な表現や硬すぎる表現は、このような表示があれば避けられるのではなかろうか。

―複数の辞書とのリンクによる豊富な検索方法

これは、ウェブ辞書など多量な情報を取り込め、かつ、リンク可能な辞書でなければ実現できないことであるが、複数の辞書が同時に引けるということは、語彙や表現を検索する上でも、また、その選択が正しいかどうかを確認する上でも非常に有効である。

５．２．２　意図が適切に伝わるようにする工夫

手紙やメール文はふつう、相手と良好な関係を維持・構築することが前提となるため、待遇的な配慮も重要となってくる。「誤用には、コミュニケーションに重大な影響を与える誤用と、それほど影響を与えない誤用が存在する」（野田2005）と考えられる。例えば、中俣（2012）は主観的な程度・評価表現の誤用が、重大な誤解をもたらす恐れがあると述べている。本研究で見られた誤用の中にも、恩着せがましく聞こえる語彙や、忠告的になってしまう表現など、待遇上問題のある誤用が数多く見られた。このような誤用によって心象を悪くしてしまうのは、残念なことである。そのような誤解を防ぎ、意図が適切に伝えられるようにするためには、以下のような工夫が必要なのではないだろうか。

―記号による待遇上の留意点の表示

目上には使わない方が良い表現には、「目上×」「待遇注意」など、上から目線になってしまう語彙には「↓」を使うなど、待遇に注意を向ける記号があると誤解を招くような表現が避けられるのではないだろうか。

—意図別の検索機能

自分が伝えようとしている「意図」を実現するためには、「挨拶」「感情表明」「意志表明」「感想」「依頼」「勧誘」「謝罪」「感謝」など意図別に検索できる機能があると便利であろう。

—社会的関係、地理的・心理的距離、場・目的・意図などによる表現の使い分け表示

現在市販されている手紙の文例集などでは、待遇レベルの高い表現や、遠方に住む相手に向けた時候の挨拶などが多いが、本稿で見たように、学習者がそれらをそのまま使ってしまうことはできない場合も多い。誤った引用を防ぐためには、それぞれの例文はどのような状況で用いられるものであるか、など「場」に対する認識を高めるようなコンテキストの条件が明記されているとよいだろう。その上で、待遇レベルや用件レベルに応じた応用例があると役立つであろう。

以上、日本語学習者のための書くための辞書に求められることは多い。しかし、いかに優れた辞書ができたとしても、活用の仕方が悪ければ、それらを活かすことはできない。実際、本実践において配布した資料には、待遇レベルによって例文があがっていたが、学習者に相手との関係や状況などをしっかり認識して活用するようにという指導に欠けていたように思う。また、語彙や文法の問題についても、授業時間やカリキュラムなどの制約上、問題部分を指摘し、学習者に訂正を求めたり正しい表現を提示してしまうのに精一杯で、学習者に個々の問題を十分に認識させ、どうしたらより良い手紙文が書けるようになるのかということに理解が深められるような指導には至らなかった。教師は、参考書を十分に活用できる力を養うための説明力や、学習者に再び同じような誤りを犯させないような指導力、類似した表現へ応用できるように力を伸ばしていく教授スキルなどを身につけなければならないと思う。さらに、手紙の指導の際に、基本的な構文の指導までカバーすることは困難であるため、日ごろから構文やコロケーションの提示やそれらの運用練習をしっかり行うことも大切である。

以上、本研究は、一教育機関における初級学習者の執筆による「お礼の手紙」のみをデータとした限定的な調査であるが、日本語教育における作文指導や辞書開発に少しでも有用な資料が提供できたとすれば幸いである。

注

（1）このプロジェクトでは、「お礼の手紙」の他にも「案内状」「キャンパスガイド」「感想文」などの作文を行っており、「感想文」以外は全て実際に相手に渡すことになっていた。

（2）参考として、『日本語Eメールの書き方』の「上手なEメールの書き方」「Eメールで使う基本的な表現」「お礼のメール」と自主作成した「季節の手紙」「お礼の手紙」を配布した。

参考文献

石黒圭・筒井千絵（2009）『留学生のためのここが大切文章表現のルール』スリーエーネットワーク

市川保子（1997）『日本語誤用例文小事典』凡人社

-------（2005）『初級日本語文法の教え方のポイント』スリーエーネットワーク

加藤紀子（2001）「中級における手紙文の指導（実践報告）」『第13回日本語教育連絡会議報告発表論文集』101-105.

蒲谷宏（1990）「上級段階における表現指導の一方法」『講座日本語教育』vol.25, 28-39.

小宮千鶴子（1992）「日本語教育における初級段階の作文指導『中央学院大学教養論叢』vol.4(2), 49-69.

富田仁美（2011）「中国人の日本語はどこに間違いが起きやすいか日本語学習者の手紙から

検討する」『KOTONOHA』vol.99 古代文字資料館, 12-17.
中俣尚己（2012）「辞書に載せるべき程度・評価表現」『日本語学習辞書科研　第４回全体研究集』
西村史子・鹿島恵（2001）「詫びの手紙文における情報の展開構造－中級日本語学習者と日本語母語話者の対照分析－」『世界の日本語教育』vol.11, 69-82.
仁田義雄（2004）「意志性から見た主語」『言語』vol.33（2）, 41–49.
野田尚史（2005）「コミュニケーションのための日本語教育文法の設計図」野田尚史(編)『コミュニケーションのための日本語教育文法』pp.1-20, くろしお出版.
蓮沼昭子・有田節子・前田直子（2001）『条件表現』くろしお出版
宮田剛章（2005）「中国人・韓国人学習者と日本語母語話者に見られる 敬語動詞の誤用訂正能力」『Journal CAJLE』 vol.7, 59-74.
村上佳恵（2011）「動詞のテ形、感情形容詞」に関する一考察」『日本語／日本語教育研究』
[2]2011
守屋三千代（2002）「日本語の授受動詞と受益性—対照的な観点から」『日本語日本文学』
12, 1–22.　創価大学日本語日本文学会
簗晶子・大木理惠・小松由佳（2005）『日本語 E メールの書き方』The Japan Times
吉川・一甲真由美エジナ（2007)「メルマガ講師室」vol.80 国際交流基金サンパウロ日本文化研究
李桂芳（2005）「台湾人日本語学習者による依頼の手紙の文章構造の問題－文の機能に基づく分析－」『早稲田大学日本語教育研究』 vol.7, 137-152.